

インプラント補綴特有のメンテナンス

岡村 光信

福岡県 岡村歯科医院 院長

講演抄録

患者も術者も期待するインプラント補綴の長期的な安定した予後とは（１）当然ながらインプラントフィクスチャーの長期的な安定、すなわち Rangert(1995)らがいう生体力学的平衡を保ち骨結合を失わないこと、つぎに（２）上部構造がこわれにくいことであろう。この“こわれにくいこと”ではインプラント補綴物特有の意味が天然歯補綴物におけるそれに加えいくつかある。まず天然歯列の補綴物と共通するものとしては、（１）セラミック材料などの破折がないこと、（２）咬合面材料においては磨耗が少なくかつ対合歯への与える磨耗も少ないこと、などがあげられる。この他インプラント補綴に特有なものとしては（３）補綴スクリュー、アバットメントスクリューが緩まない、また破折しないこと、（４）もしスクリューが緩んだり、破折したときそのリカバリーが容易であること、である。以上のようなインプラント補綴において予想される様々な合併症を、治療に際して術者、患者ともに認識しておく必要がある。

インプラント補綴で長期的安定が得られたならば、天然歯における補綴物に比較し、再修復の大きな原因の一つである２次う蝕の心配はない。また補綴物がスクリュー固定式であれば容易に修理も可能であり、retrievable（術者可撤式）であるため、reparable(修理可能)なものとして考えることができる。

本講演では、（１）こわれにくい上部構造のデザインおよび素材の選択、（２）清掃性と自浄性（インプラントフィクスチャー間距離の観点から）、（３）補綴物修理とリカバリーの容易さ（セメント固定式かスクリュー固定式かという観点から）などを中心に、過去の経験もふまえながらインプラント補綴特有のメンテナンスについて論じてみたい。